

美術授業に カメラ

APPA(社)日本広告写真家協会出版情報事業部
『美術授業にカメラ』の実践記録です。
企画編集 鈴木英雄



『子どもミュージシャン』 第6学年2学級79名

平成20年10月31日
東京都調布市立布田小学校
時任 勝教諭の授業



時任 勝教諭
写真/城ノ下俊治

作品を直に見る場合と、写真や映像を通して見た場合とは、その印象が良くも悪くも実際とはずいぶんと掛け離れたものを感じる時があります。特に立体作品は写真にすると、展示された環境によって大きさはもとより材質、量感など、伝わってくるものに限界というか、隔たりを感じる時があります。

今回、授業に写真を取り入れることを依頼されながら、判然としないままに「ミュージシャン」を作る授業を5年生に実践しました。日常の煩雑さにかまけて、写真を取り入れるのは、作

ってから何とかなるという全く裏付けの無い自信と勝手な推測のもとに進めてきました。

この題材はミュージシャンとステージを一体化させて完結するものでした。当然、子どもは何をするミュージシャンか、どんなステージが似合うかなどを考えて作りました。これを全く別の作品として写真にすると、当然のごとくステージは不要なものでした。

思い入れも強く、ステージにしっかりと固定されたミュージシャンを取り外すには予想通り、かなりの言い訳を

必要としました。が、取り外してみると、子どもの興味は写真のフアインダーで再構築される新たなステージへ、簡単に飛び移ってしまいました。その様子は武器となる道具にした、キューブリックの映画の猿のようでもあり、可能性を感じ取った自信の表れともいべきものでした。

カメラを持つ姿はまるで映像アーティスト。



も十分に生かすことのできる学習であったと考えています。

カメラを媒体にした虚像と実像の狭間に、子どもが感じたものは、限界や隔たりではなく新たな表現の可能性があったようです。

文/時任勝